

『小さな命の証』

Aさん

証をする恵みを心から神様に感謝いたします。

証をする勇気を与えてくださったのは、言うまでも無く神様でした。

最近、テレビでよく耳にする幼児虐待のニュース。ここ数年でその件数は伸び続け、今では4万5千件にもなるそうです。本当に心を痛めます。ただこの数字は氷山の一角に過ぎずこの数倍とも言われています。

私も一歩間違えれば、自分自身がニュースになっていたかもしれません。自分の体験と神様が起こされた奇跡、そしてその中での後悔や怖さ、ずっと心の中で奥深く眠っている思いと何かできないかという思いが交錯している時でした。

6月の下旬の礼拝で「神様の栄光を現す人生」というメッセージを聞くことが出来ました。その中で「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分の体をもって、神の栄光を現しなさい。」第Iコリント 6章20節の御言葉でした。私にも神様の栄光を現すお手伝いが出来ると示された時でした。

その日より、1ヶ月ほど前に小さいのちを守る会（以下、PLJ）の会報が家に届き、毎年恒例の軽井沢キャンペーンの記事を目にしていた私はPLJの中であまり触れられず、語られることも少ない事、それは神様から与えられた尊い命を守るため、予期せぬ妊娠をして「産む使命」を果たす者としての証をすることでした。このことがはっきりと示されたのは、その翌日偶然に辻岡先生からお手紙を頂いたことでした。神様は、絶妙なタイミングで私に証しする勇気と力を与えてくださいました。神様は、私が生まれる前から全てをご存知で計画を持って手を差し伸べてくださいました。

まずは、神様を知る前の私についてお話ししましょう。私の家庭は、父、母、兄、姉そして私の5人家族でした。

父は38歳の時に前妻を病気で失い、残された2人の子どもを抱えて私の母と出会い結婚し、父が40歳の時に私が生まれました。

兄と姉とは一回り以上、年が離れていたため兄弟喧嘩することもなくひとりっ子のように育てられました。兄と姉は私が中学生の時と高校生の時に結婚し、それぞれの家庭を持ち、家には父と母と私の3人での暮らしが待っていました。

高度成長期、バブル時代に高校、大学を過ごし、OL時代も結構華やかにすごしておりました。

そんな中、会社を経営していた父は、がんという病魔にかかり半年あまりで亡くなってしまいました。会社も兄の代に替わり、母と二人暮らしの日々を過ごしておりました。

私の両親は昔から、結婚相手は親が決める!と時代にとぐわな面がたびたびありました。私の家は親が言うことは絶対でした。経済的には恵まれていましたが自由が少なく、自分をカゴの中の鳥のように思っていました。それは、母と二人になってからも変わらず、何回もお見合いもしましたが、私の心を動かす人には巡り会いませんでした。私は親が連れてきた人との結婚ではなく、自分が心から好きになった人と結婚したいと決めていたのです。



OL時代にあるきっかけで知り合った人との交際が始まりましたが、私の母親のおめがねにかなう人ではありませんでした。しかし、親に隠れて交際しておりました。そんな中でも結婚の約束をして二人の愛を確かめ合い幸せを感じていました。

もともと生理が不順な私は、今回も遅れているなあ〜くらいしか感じていませんでしたが、なんとなく体の変化に気がつき始めました。もしかして…まさか…妊娠検査薬でも信じる事が出来ず、こっそりと病院に行ってみると「おめでとうございます。」と声を掛けられました。

エッー！なんで…妊娠？自分を疑いたくなりましたが、これで既成事実をつくり、できちゃった結婚しちゃえばいいかも…と心の中でひそかに思っていたのも事実です。

でも現実には甘くありませんでした。親が認めない人との結婚は絶対に許されない！もしかしたら、強制的に病院に連れて行かれるかもしれないという不安が高まりました。親には一人前の社会人として認められず、彼と話し合い、母宛の手紙を残し、家を出て彼のアパートに身を隠していました。母も私の妊娠を知り、心配してあちこち探しまわったようです。

おなかの赤ちゃんが安定するまで、辛抱していれば、明るい日差しがきつと指すのではという期待を胸に過ごしていました。



だんだんおなかの赤ちゃんも成長し、ほんの少しですが胎動を感じていたころから彼の態度が冷たくなってきたのです。

それは、私には理解できないことでした。「本当に産むの？」という冷めた言葉、「おれは、子どもがほしいんじゃない！お前がほしいんだ！」…この人なにを言っているんだろう？

日に日に彼に冷たくされ、ののしられるようになりました。「おろしてくれないか」こんな言葉も飛び交うまでになり、暴力も受けるようになったのです。気が付けば妊娠5ヶ月



目の安定期に入っていました。

その間、どうしてこんなひどい目に合うのか、希望からどん底にふり落とされて、彼が何日も帰ってこない暗い部屋で様々なことを思い、絶望の中、死ぬ事を考えるようになったのです。

包丁を手に取り手首に持っていくと何故かおなかの赤ちゃんが「ここにいるよ」と言わんばかりに動くのです。

また、子どものことを思い食事を摂らなければいけないと無理やり食べて過食症のようにもなりました。

初めての妊娠、そして不安、悲しみ、私は精神的にボロボロで、限界を乗り越えていたかもしれません。

そして彼との結婚もあきらめ身重の体で家に帰ったのです。

母親の目をまともに見ることが出来ませんでした。

母には本当にごめんなさいと心から叫んでいました。

子どもを産むことを許してくれた母でしたが、どれだけの決心と悲しみを持っていたことでしょう。

母は、とても気丈でしたが、この時ばかりは二人で心中するしかないと思っていました。私自身、親不孝で罪深く、心から深く、深く反省しました。

しかし、出産までの残りの日々も心の不安は消し去ることが出来ませんでした。相手の男性への憎しみも日に日に増してきました。おなかが少しずつ目立ち始めたころ、とんでもない不安と恐怖を感じました。

それはこれからの将来の事でした。生まれた時から片親で子どもははじめの思いをするかもしれない。この先どんな試練や困難が待っているだろうか。子ども自身が成長して自分の存在をどう感じるのだろうか。もしかしたら、ストレスで虐待してしまうかもしれない…。

こんな不安を持って本当に育てられるのか。強くしつかりとした意思を持ち、周りの理解と環境と経済力が必要だと思うようになりました。

この不安とストレスは、身重の私にとってとてもつらく、身が引きちぎられるような思いで毎日を過ごしていたのです。



そんな不安を感じている時に偶然というか不思議というかPLJの存在を知ることになりました。

今の時代なら、インターネットや携帯電話で簡単に検索できますが、まだこの時は、この会のことすら知りませんでした。

本当に不思議な力が動かしているとしか考えられないほどの速さでPLJを通して養子縁組をされた牧師夫妻に

会う機会を与えられました。

4歳と2歳のかわいい女の子、上の子はお父さんに、下の子はお母さんにべったりくっついて、しかもご両親にそっくり、養子なんてとても信じられない光景でした。部屋のあちこちにはお子さんの写真が飾られて、胸が熱くなりました。

牧師夫人が私にこう言ってくださいました。「子どもがもう少し成長したら、お母さんが産んだ子どもではない」と言うんです。「でもあなたたちは私の子どもなんだよ」とそして牧師先生は「神様から与えていただいたんだよ」と子どもたちに話すんです。とやさしく私に言ってくださいました。

私がはじめてクリスチャンの方としっかり交わった時の事です。なんて素敵な家族なんだろう！なんて暖かな家庭なんだろうと感じ涙があふれてきました。

私の母も同じように感じ泣いておりました。

この家族に会えた事は、私の迷いや不安を消し、この道を歩む決心につながったのだと思います。

神様は、どん底にいる私に一筋の光をあててくださったのです。そして神様の哀れみにより私に手を差し伸べてくださいました。

そして、辻岡先生ご夫妻に初めてお目にかかり色々聞き、また今後どうすればよいかについて教えていただきました。

先生ご夫妻は、今までの苦しかった思いや不安がにじみ出ていた私の顔を見て、大変だったんだろうと感じ取ってくださいました。

先生は私が帰る直前にこうおっしゃってくださいました。「必ず、祝福されますよ。必ず、神様は祝福してくださいますよ。」と、今までの心のもやもやした糸がスルリとほのけ、私は導かれた道を素直に歩み始めました。



PLJの働きをされている産婦人科は、当時4ヵ所ありました。これも不思議ですがその中で長崎の産婦人科に行くことを一晩で決めることが出来ました。後から思うと神様の色々な力が働いていたと思います。

長崎の産婦人科「いそのクリニック」は、病院内にチャペルを持ち、磯野先生は、何人かのPLJの出産にかかわってこられた方です。

長崎に来て今までの自己中心的な自分を思い出し、「私はなんという罪を犯してきたのだろう」という罪悪感でいっぱいでした。

まず、長崎の皆さんは自分の過去を恥じている私に暖かく接し、また励ましてくださり、心から救われました。

長崎についてからの体調は、高血圧で妊娠中毒症も併発していました。安静期間が長くどちらかと言うとベットに横になっている時間の方が長かったかもしれません。

この時から毎日日記を書くことにしました。この教訓、この試練は絶対に忘れてはいけないことです。毎日の思いを書き続けました。

また、神様を知らなかった私は初めて聖書を手にし、毎朝時間を決めてベットの上で読んでいました。わからないところは先生に聞いて、少しずつですが聖書の御言葉や礼拝が楽しみになる自分を見つけ、自然と神様に触れ合う時間が持てました。

そんな中である日の礼拝のメッセージでハッと気づかされたのです。エペソ2章11～22節の箇所、11節の最初に「ですから、思い出してください」とあります。それは神様を知る前の自分を思い出ささいという意味だと説明されました。確かにここに来るまでなんて自分って愚かなんだろう。なんて罪なことばかりしてきたんだろうと昔のイヤな自分を思い出しました。

13～14節「今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近いものとされたのです。キリストこそ私たちの平和であり…」という御言葉を聞いて、神様に触れ合う機会がたくさん出来て、本当に救われた！という気持ちになりました。心の平安ってこういうことなのか。とても心が清らかになり、その日の礼拝は終わりました。

翌日、牧師先生に「私はもう神様を信じています」と告白いたしました。私の罪は、イエス・キリストの十字架によって葬り去られたのです。

何故か、止めどもなく涙が流れ、自分が神の子になった瞬間を味わうことが出来ました。そして、聖霊様が心の内にいてくださる喜びを感じました。

その告白から2週間後、その時はやってきました。

すでに破水し、高血圧であった私は、ひそかに帝王切開の準備もされていたのです。陣痛がだんだん激しくなり、磯野先生のお母様と看護婦さんに交互に腰をさすっていただきましたが、血圧は高くなる一方でした。

どうしようもない痛みの中、ついに分娩台の上に横たわりました。「神様はこんな私でも助けてくれるかなあ」といっている私に磯野先生ご夫妻やお母様が「大丈夫！きっと助けてくださるよ。」と言ってくださったことに安心したのか不思議と血圧が正常時まで戻ったのです。帝王切開の準備は中止となり、自然分娩に切り換わりました。

この時、辻岡先生ご夫妻も祈ってくださっていたということを後で知りました。痛みから20時間、かなりの難産でしたが、たくさんの方々のお祈りが届き、神様に守られて、元気な男の子を出産しました。命の尊さを改めて教え

られ、感動で涙が止まりませんでした。

一般的には出産した直後に母性愛を感じさせるために赤ちゃんを抱きますが私にはそれが許されないことでした。

しかし、私の側に神様がいてくれて、「泣くな! きっとあなたに祝福があります」と語ってくださったのです。赤ちゃんは、新しいご両親のもとに幸せを運び、そして幸せを一杯受けるでしょう。

「僕は、生まれてきてよかった」といつか言ってくれることを願って、私の心の中で成長してくれることでしょう。

出産のことをはじめ、全てのことが不安で訪れた長崎でしたが、神様に会い、色々な方に温かく迎えられて本当に救われました。

長崎から帰る前に神様は、私に御言葉を送ってくださいました。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神様は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」(第Iコリント 10章13節)

御言葉通り、私は試練とともに脱出の道を備えていただきました。何より、神様に会い、神様を信じることができた喜びに心から感謝しております。そして、たくさんのすばらしい出会いを与えてくださった恵みに感謝しています。

しかし、家に帰り、私の心の中は、相手の男性へのおびえと憎しみに満ち溢れていました。

辻岡先生のご紹介で教会も決まり、牧師先生に全ての思いを話し、解放の祈りをさせていただきました。

また、自分は罪から救われ、赦されたのだから、相手を赦し、相手のために祈ることが大切だということもわかり始めました。

出産から5ヵ月後に洗礼を受け、新たに神の子としての幸せを感じ始めました。いつのまにか、相手への気持ちは憎しみから赦しへと変わっていた自分に気づき過去から解放されました。

ただ、養子縁組の手続きは簡単にはできませんでした。でも、神様は、全ての手続きを守り導いてくださいました。

また、住所も2度変え、その手続きだけでも神経を使い、とても疲れ果ててしまった。自分だけでなく、様々な人たちの手を動かし養子縁組されていく流れを体験いたしました。



その後は、新たな人生を歩みたいと思うようになり、結婚を意識して祈り始めました。母のところにも色々な縁談の話があり、母もよい話だと薦めるのですが、クリスチャンになった私はどうしてもクリスチャンと結婚すると譲りませんでした。

そのような中で、母は辻岡先生に「娘がクリスチャンになって、どうしてもクリスチャンと結婚するというのだからあなたの責任ですよ」と電話をしていたのです。そして私は、相手がクリスチャンで私の過去も全て理解してくれる人を望みますと毎日祈っていました。

ある日、辻岡先生からお電話をいただきました。手続きが順調に進んでいるというお知らせかなあと思いお話ししてみると、「あなたに会ってほしい人がいるんだけどね〜」それはお見合い話でした。

毎年、真夏に行われる軽井沢キャンペーンの事は、聞いてはいましたが、このことがきっかけになるとは、神様しかご存知ありませんでした。

軽井沢フェローシップバイブルキャンプ場の管理人である関口さんのところに、辻岡先生の奥様からキャンペーンの日取りについての連絡があった日のことです。用件はすべて終わり、電話を切ってから、関口さんの頭によぎった事がありました。それは親しくしていた一人の知人のことでした。

彼は、事情があって離婚してから、神様を知り、救われましたが、一人寂しく暮らしているような状況で彼を何とかしなければいけないという関口さんの思いが次の行動に出たのだと思います。後々これは神様の働きによるものだという事もわかりました。

そうして、話が進み彼と会う事になりました。穏やかそうな風貌と気さくな感じが私を素直にさせて何度もデートを繰り返しました。

私たちは、何度も何度もサタンの攻撃に遭い、これでおしまいかと思っても聖霊様が働いてくださり、語ってくださったからこそ彼との結婚を真剣に祈ることができました。

「キリストのことばをあなた方のうちに住ませ、知恵をつくして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊と歌とにより感謝にあふれて心から神に向かって賛美なさい。」(コロサイ 3章16節)

祈りの中で神様は様々なやり方で結婚について、私にわかりやすく教えてくださり、神様の御心を示めされ心から平安を感じることができたのです。

彼自身も様々な経験や試練を通り、神様を信じて救われた方でしたのでお互いの傷を癒す事もできたからだと思います。

彼には、二人の子どもがおりましたが、離婚後1人の男の子を病気で亡くし、もう1人の女の子とは、離婚後、会うことができませんでした。神様には時があるから

お互いの子どものことを祈ることを約束しました。

そして、満開の桜にも祝福されながら、私たちは結婚いたしました。

辻岡先生が以前おっしゃった「必ず、祝福されますよ!」ということばを思い出し、改めて神様の恵みに感謝しました。

今は神様の糸を真ん中にして夫婦二人で三つ摺りの糸の生活が続いています。その中でも、色々な問題や苦勞、悩み、そしてバセドー病との闘い、今でも治療は続けていますが、神様の守りの中、数々の恵みをいただき、感謝の日々を過ごしています。

数年前には先生より子どもの写真を送っていただき、幸せそうに笑っている顔を見て本当にうれしく思いました。生まれる前から神様に触れ、今も神様とご両親の愛のもとで生きていると思うと本当に感謝です。

毎日、子どもとご両親のためにお祈りしています。

そして、主人は2年前のクリスマスイブの日に奇跡的に一人娘に会うことができました。私は彼女を神様が私に与えてくださった実の娘として迎えました。

神様を知らなかった、彼女も昨年洗礼を受け、今では同じ教会に通う恵みをいただいています。

私の母も84歳になりますが、元気でひとりで頑張っています。今は、理解ある主人をほめ、わだかまりもなく色々な事を喜び、過ごしております。まだ、神様の本当の愛に気づいておりませんが、必ず救われると信じています。

この証の最後に「ふたりのおかあさんからあなたへのおくりもの」という詩を紹介したいと思います。これは、数年前にNHKの朝の連続ドラマの「瞳」のワンシーンで紹介された詩です。このドラマは、東京の下町で暮らすある里親と里子の家庭を描いています。

「ふたりのおかあさんからあなたへのおくりもの」という絵本に掲載されているもので、作者不詳の英語の詩を日本語に訳したものです。



「ふたりのおかあさんからあなたへのおくりもの」

ある処に二人の女の人が居ました。

お互いのことを、まったく知らない二人です。

一人をあなたは覚えていません。

もう一人をあなたはお母さんと呼んでいます。

その二人の居ることが、

他のだれとも違うあなたらしさに繋がっています。

一人はお星様のように、あなたを優しく見守り、

もう一人はお日様のように、

あなたを暖かく包みます。

一人はあなたを、おなかのなかで育み生みしました。

もう一人はあなたと一緒に生きてきました。

一人はあなたに愛を求める力を与え、

もう一人はあなたを、どんな時も愛しています。

一人はあなたを、その国の人にし、

もう一人は名前を付けてくれました。

一人はあなたに生まれ持った才能を与え、

もう一人はその才能を伸ばして

夢を持たせてくれました。

一人はあなたに喜びや悲しみを感じる力を与え、

もう一人は不安で一杯のあなたを

安心させてくれました。

一人はあなたの生まれたばかりの可愛い微笑を

何時も思い、

もう一人はあなたの悲しみを包み込んで

くれました。

一人はあなたと別れました。

それがあなたの為に出来る精一杯の愛でした。

もう一人はあなたに逢いたくて一生懸命祈り、

神様が迷わず引き合わせてくれました。

そして今あなたは、ずっと気になっていたことを

目に涙を浮かべながら聴きます。

